

「本人の思いを医療・介護の連携で支える」

津生協病院 SST 看護師 成子佳代

(はじめに)

当院で摂食嚥下サポートチーム（以下SST）活動を開始して1年が経過。地域連携学習会で活動を知ったケアマネを通じ、経口摂取への強い思いを持つ嚥下障害患者の入院が増加した。嚥下機能を評価しリハビリ介入にて経口摂取可能となった事例を報告する。

(事例1) 90代男性、嚥下障害・認知症。

誤嚥性肺炎でEDチューブでの栄養管理。VEにて完全側臥位法が安全であるが本人・家族の強い希望により座位での食事摂取となる。また胃瘻も造設し、経口摂取では不十分な栄養量を胃瘻より確保。家族に退院指導し在宅へ退院。

(事例2) 80代男性、嚥下障害・脳梗塞後遺症。

施設入所中、EDチューブ挿入し昼のみペースト食を摂取。当院外来にてVE施行。EDチューブ抜去し食事回数up可能と判断されるも施設では管理が難しいため栄養量安定のため当院入院される。完全側臥位法にて自己摂取可能、EDチューブ抜去し座位での食事摂取量安定後、施設へ退院。

(おわりに)

急性期の病院で経口摂取困難と評価され、経管栄養となる患者も多い。今回嚥下機能を再評価し援助することで経口摂取へと移行することが出来た。経鼻栄養や側臥位での食事介助患者の受け入れが難しい現状がある。今後も地域・介護の連携を強め嚥下機能・QOLの向上を目指した活動を行っていききたい。